

地方圏における専門学校教育の意義とは何か

— 職業－地域的社会化の観点から —

植 上 一 希

福岡大学

The Significance of Professional Training Colleges in Regional Areas

— from the Perspective of Occupational and Regional Socialization —

Uegami Kazuki

Fukuoka University

Abstract : What is the significance of professional training college education in regional areas, from the perspective of regional socialization through occupational socialization?

To approach the above question, we established the perspective of occupational-regional socialization and examined the education provided by four professional training colleges in Nagano Prefecture, from this viewpoint. The results demonstrated that professional training colleges in regional areas cultivate members of occupational-regional communities through vocational education and form the foundation for integrating these members into occupational-regional communities. The academic significance of this study lies in delineating the significance of professional training college education in regional areas — a significance that had previously been difficult to grasp — from the perspective of vocational-regional socialization. Furthermore, this study demonstrates that the perspective of vocational-regional socialization is an effective approach for understanding professional training college education, which is another significant contribution of this work.

Key Words : Professional training college, vocational education, the significance of professional training colleges in regional areas, vocational-regional socialization, members of the local community

抄録 : 職業的社会化を通じた地域的社会化の観点からみた地方圏における専門学校教育の意義とは何か。この問いにアプローチするために、本論では、職業－地域的社会化の観点を設定し、その観点から長野県の4つの専門学校教育を検討した。その結果、地方圏における専門学校は、職業教育を通して、職業－地域社会のメンバーを育成し、それらのメンバーを職業－地域社会に受け入れさせる土壌を形成している、ことを示すことができた。その実態や意義がとらえられることがなかった地方圏における専門学校教育の意義を、職業－地域的社会化の観点から描き出したことに、本論の学術的な意義がある。また、専門学校教育を把握する際のとらえ方として、職業－地域社会という観点が有効であることを示すことができたことも、本論の意義である。

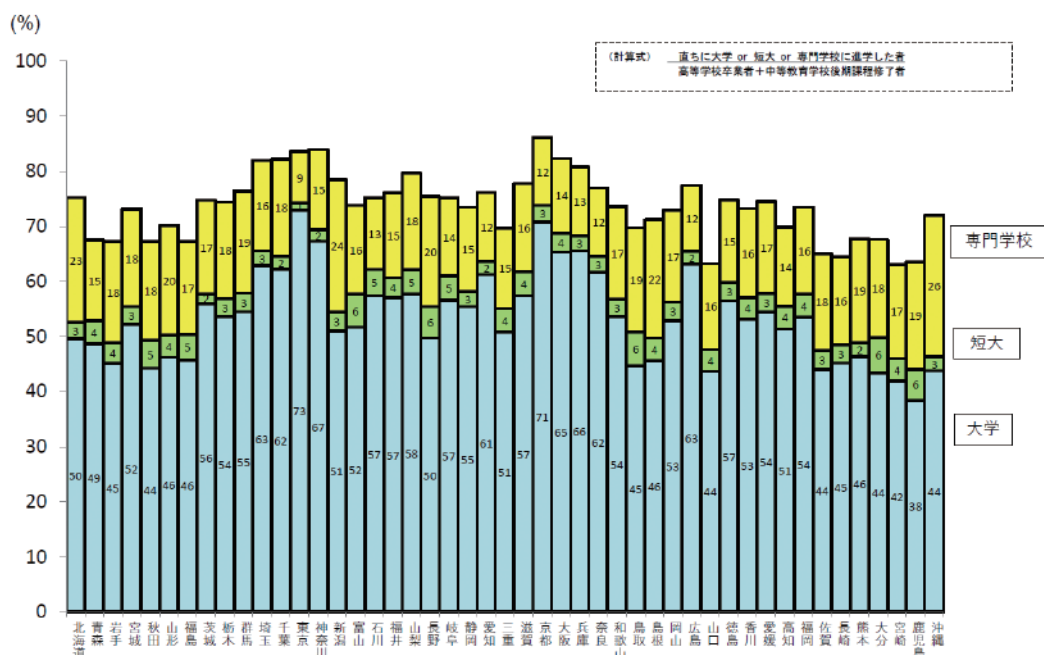
キーワード : 専門学校、職業教育、地方圏における専門学校教育の意義、職業－地域社会、地域社会のメンバー

1. 本論の問題意識

(1) 地方圏における専門学校教育の意義への着目

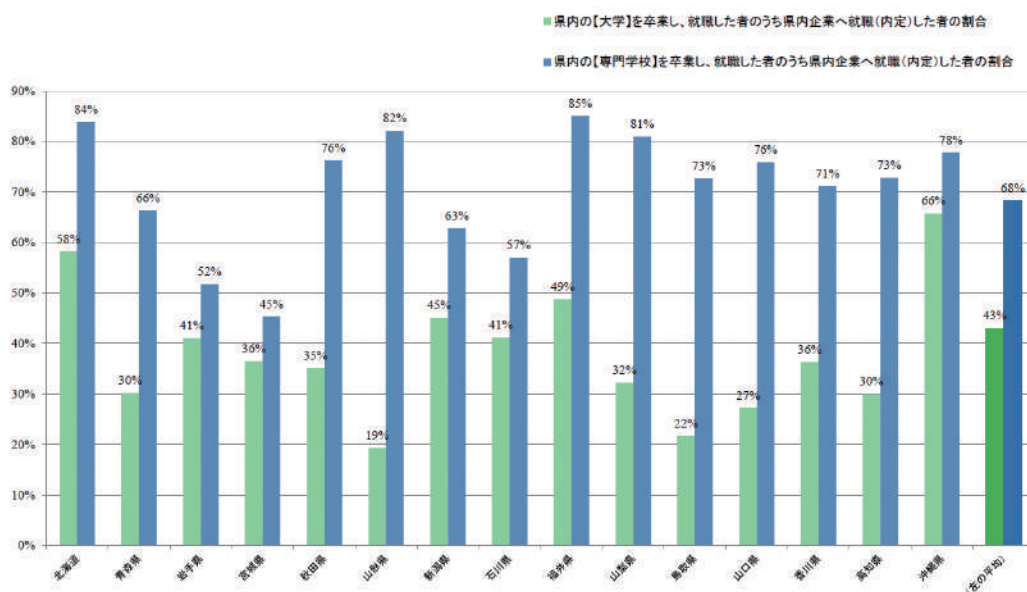
専修学校専門課程（以下、専門学校）は、1976年の制度開始以来、高等教育段階における中核的な職業教育機関として歴史的に位置づいてきた。とくに、高等教育機関が少ない地方圏においては、高校卒業後の重要な進学先になってきたと同時に、地域

の中核的な人材養成機関としても位置づいてきた。たとえば、図1は都道府県別の高校新卒者進学率を示したものであるが、見てわかるように、地方圏における専門学校進学率は都市圏よりも高い。また、図2は地方圏における専門学校・大学卒業者における地元就職の状況に関するグラフであるが、地方圏において専門学校卒業生が地元に残って就職する傾



資料出所：専修学校の質の保証・向上に関する調査研究協力者会議（第36回）配付資料『【参考資料3】専修学校関係基礎資料集』。「都道府県別高校新卒者の進学率」（出典：「令和6年度学校基本統計」）。

図1 都道府県別高校新卒者の進学率



資料出所：専修学校の質の保証・向上に関する調査研究協力者会議（第36回）配付資料『【参考資料3】専修学校関係基礎資料集』「専門学校・大学卒業者における地元就職の状況」（令和5年3月卒業者の状況。文部科学省専修学校教育振興室調べ＜各県の労働局発表の就職内定状況調査より作成＞）。

図2 専門学校・大学卒業者における地元就職の状況

向が強いことがわかる。

他方、地方圏における人口減少や産業構造の変化のなかで、高等教育機関においては「地域ニーズを踏まえた質の高い教育機会の確保と人材の育成がこれまで以上に重要」になっている（中央教育審議会大学分科会大学振興部会、2022）。こうしたなかで、近年、地方圏における専門学校の意義や役割に注目が集まりつつある。たとえば専修学校教育政策の方針として提言された「これからの専修学校教育の振興のあり方について（報告）」（2017年）においても、専門学校が果たしている「地域のひとづくり」機能が評価され、「地域のひとづくり」は、専修学校教育振興施策の「重点ターゲット」の筆頭に置かれており、2017年度からは継続的に文部科学省の「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」が多様に展開されてきている。

しかしながら、そうした事業成果の多くは、受託者の報告書として散在するのみであり、学術面からの体系的な整理と分析はなされていない。専門学校を対象とし、かつ地方圏という地域性を考慮しながら、その具体的な教育活動の実態を捉える研究は、その重要性に比してほとんどなされていない。その学術的空白を埋めていくことが求められている。

（２）職業的社会化の観点からの専門学校教育へのアプローチ

では、地方圏における専門学校教育の実態や意義をとらえていくために、どのようなアプローチが有効であろうか。本論が着目するのが、職業的社会化の観点から専門学校教育の実態や意義をとらえてきた、植上一希（筆者）の研究である。その概要について、簡単にまとめておこう。

専門学校で行われる職業教育は、職業の多様性と、職業教育を構成する要素の複雑性ゆえに、そもそも把握が難しい。また、職業教育に対しては、＜知の固定化・狭小化＞と＜選択肢の固定化・狭小化＞という２つの否定的な観点があり、そうした観点から専門学校教育が一面的にとらえられてきたという問題もある。そうした難点や問題を乗り越え、専門学校教育の実態や意義をとらえるために、植上が提起してきたのが職業的社会化という観点からのアプローチである。

植上による職業的社会化概念の定義は、職業社会へ参加する側と受け入れる側のそれぞれを主語にした、以下の形でまとめられる。

①人々がそれぞれの職業社会に接近・参入・定位していく過程のなかで、必要な知識、技能、行動、価値観などを習得していく過程と営みの総体。

②職業社会に接近・参入・定位をしていく人々に対して、職業社会の側が必要な知識、技能、行動、価値観などを習得させていく過程と営みの総体。

植上による一連の研究は、専門学校教育とそこでの学びを、職業的社会化（とくにその接近・参入段階）の営みとしてとらえることによって、専門学校において実施されている多種多様な職業教育を総括的にとらえることを可能とし、一面的・否定的にとらえられがちだった専門学校教育の実態や意義をとらえなおすことに貢献してきた。

では、地方圏における専門学校教育の実態や意義をとらえていくことを目指す本論が、こうした職業的社会化の観点からの専門学校教育へのアプローチに着目する理由は何か。それは、職業的社会化概念が、職業社会以外の様々な社会（「地域社会」も含む）への社会化との多層性や連関性をも包含する点にある。この点について、もう少し説明を加えておこう。

そもそも、職業社会とは、その他の職業社会はもちろんのこと、職業領域以外の社会も含む、様々な社会との重層・連関のなかで形作られるものである。それゆえに、こうした社会の重層性・連関性という性質をもつ職業社会に参入する個々人の側に目を向けたとき、彼・彼女らは職業社会を構成する多層な社会への社会化を通して職業的社会化を果たしていくのであり、また、職業的社会化の過程のなかで連関する諸社会への社会化も果たしていくという見方となっていく。そして、この諸社会のなかには、当然のことながら、地域社会も含まれる。

すなわち、職業的社会化概念には、職業的社会化と地域社会への社会化（＝地域的社会化）とを連関させて把握することを可能とする、概念の拡張可能性があるのである。本論が着目する理由はここにある。

しかしながら、これまで、職業的社会化と地域的社会化を関連させて専門学校教育の実態や意義にア

アプローチする研究はなされてこなかった。本論は、職業的社会化の観点からなされてきた専門学校研究に、地域的社会化の観点を加えて発展させる研究としての位置づけをも有している。

(3) 本論の問いと目的

上述した問題意識から、本論は以下の問いを設定する。

「職業的社会化を通した地域的社会化の観点からみた地方圏における専門学校教育の意義とは何か」

この問いを、2節で述べる方法と課題に沿って検討していくことが本論の目的である。

2. 本論の方法と課題

(1) 観点の設定

1節の問いで提示した、「職業的社会化を通した地域的社会化」の観点について、改めて確認しておこう。

まず、地域的社会化の概念については、職業的社会化に合わせる形で、以下のように定義することができる。

①人々がそれぞれの地域社会に接近・参入・定位していく過程のなかで、必要な知識、技能、行動、価値観などを習得していく過程と営みの総体。

②地域社会に接近・参入・定位をしていく人々に対して、地域社会の側が必要な知識、技能、行動、価値観などを習得させていく過程と営みの総体。

そのうえで、本論では、「職業的社会化を通した地域的社会化」を、さしあたり以下のように定義したい。

「目的や結果としての地域的社会化に重点が置かれている職業的社会化の営み。範囲としては職業的社会化と地域的社会化が重層・連関する部分を指し示す」

本論は、このように定義した、「職業的社会化を通した地域的社会化」（以下、「職業－地域的社会化」）の観点から、地方圏における専門学校教育の意義をとらえていく。なお、以降、職業社会と地域社会が重複・連関している領域については、「職業－地域社会」と記す。

(2) 検討課題

本論では、地方圏における専門学校教育の具体的な事例検討を行うことで、1節で設定した問いに迫っていく。その際、本論が具体的な検討課題として設定するのが、以下の諸点である。

- ・何を目的としているのか＝教育目的
- ・誰を対象としているのか＝教育対象
- ・どのような方法か＝教育方法
- ・どのような効果があるのか＝教育効果

取り扱う事例におけるこれらの諸点の特徴を、職業－地域的社会化の観点から描き出すことを、本論の検討課題とする。

(3) 対象とする事例

本論では、長野県にある以下の4つの専門学校を、検討対象とする。

- ・長野医療衛生専門学校（上田市）
- ・長野美術専門学校（長野市）
- ・丸の内ビジネス専門学校（松本市）
- ・豊野高等専修学校（長野市）

長野県は従来から高校新卒者の専門学校進学率が高い自治体であり、地方圏における専門学校教育の意義を検討するにあたって、ふさわしい地域である。なお、2024年3月での長野県における高校新卒者の専門学校進学率は20.1%、全国で第5位（1位：沖縄、2位：新潟、3位：北海道、4位：島根）となっている。

地域性や分野特性と、長野県専修学校各種学校連合会の助言を参考に、上記の4つの学校を事例として選定した。

関係者との事前打ち合わせなどを経て、2024年9月に各専門学校への訪問調査・インタビュー調査を実施。それぞれの学校の責任者（理事長・校長・教務主任など）に2時間から3時間程度の半構造化インタビューを実施した。本論はその調査で得られたデータを用いていく。

3. 長野医療衛生専門学校（上田市）の検討

(1) 学校概要と分野特性について

(a) 学校概要

長野医療衛生専門学校は長野県の東信地区唯一の歯科衛生士養成施設として設立され、現在、言語聴

覚士、音楽療法士を養成する学科も有する専門学校である。本論では、歯科衛生士学科に焦点をおく。

インタビューは、歯科衛生士学科の教務責任者である、宮崎栄理子学科長と宮本佑美教務主任に対して、1時間半程度実施した。

<表1 長野医療衛生専門学校の概要>

<p><歴史></p> <p>1997年 「上田衛生専門学校」の設立</p> <p>2001年 「長野医療衛生専門学校」に改称</p> <p>2006年 姉妹校「長野救命医療専門学校」が開校</p> <p>※東信地区唯一の歯科衛生士養成施設として設立・発展。その他の医療職養成も担う。</p>
<p><学科構成></p> <p>歯科衛生士学科、言語聴覚士学科、音楽療法士学科</p>

(b) 分野特性

水田真理が明らかにしているように、分野別にみると、地方圏において学生数が多いのは医療分野や衛生分野、教育・社会福祉分野など、いわゆるエッセンシャルワーカー養成の分野となっている。

こうした地方部における専門学校の分野特性を考えると、医療分野に位置する長野医療衛生専門学校の検討は、地方圏における典型的な専門学校の検討として位置づけることができる。

(2) 教育目的・教育対象・教育方法

(a) 地域の歯科衛生士養成という目的

長野医療衛生専門学校の教育は、「地域の歯科衛生士を養成する」という明確な目的のもと展開されている。

長野医療衛生専門学校は長野県東信地区唯一の歯科衛生士養成施設であり、設立以降、東信地区の歯科衛生士養成を一手に担ってきている。設立以前は、東信地区における歯科衛生士不足は慢性的に不足しており、地域歯科医師会の強い要望のもと学校が設立され、発展してきたという経緯もある。

したがって、学校としても「地域に医療人材を輩出し、貢献することは当然の責務」(宮崎学科長)という認識を強く持っており、地域社会の歯科衛生士養成が教育目的として明確になっているのである。

(b) 地元進学・就職希望者の受け皿として

長野医療衛生専門学校の学生のほとんどは東信地区(ならびに北信地区からも)の高校新卒者である。

「入試面接の時点で、卒業後も実家から通勤可能な範囲で就職先を選び、そのまま実家で暮らす、というイメージをもって入学する学生が多くいます」

(宮本教務主任)

「実際に、この学校がなくなってしまったら、歯科衛生士になるために東信地区や長野県を離れていかなければならない。条件的にそれができない人もいるでしょう。私たちは、生まれ育った地域で学び働きたいという人たちの教育機関としての役割も強く意識しています」

(宮崎学科長)

上記の語りが端的に示すように、長野医療衛生専門学校は、地元への進学や就職を希望する若者たちの受け皿としての役割を果たしている。

(c) 地域の歯科衛生士・歯科医師との連携による教育展開

地域の歯科衛生士や歯科医師との連携がなければ、そもそも長野医療衛生専門学校の授業や実習は成り立たない。「卒業生が、将来一緒に働く後輩に期待を寄せ、育ててくれる」(宮本教務主任)ことこそ、長野医療衛生専門学校の教育の特徴だという。

そして、外部講師としての関与、実習の受け入れを通して、地域の歯科衛生士や歯科医師が、地域医療に必要な知識・技能・行動・価値観などはもちろんのこと、地域で一緒に働いていく期待を伝えている。そうした「実習等を通して、学生と職場との適性もわかってきて、学生自身が信頼できる職場を見つけることができる」(宮崎学科長)ことも、連携教育の大きな特徴である。

(3) 教育効果

(2)項で整理した教育を通して、学生たちは地域医療に必要な知識・技能とともに、地域医療で求められる行動や価値観、さらには地域医療人としてのキャリアイメージやアイデンティティを形成していく。

「それぞれの職場で具体的に求められる技能や価値観が身に着くことで、学生たちも自信を培っていきます」（宮本教務主任）

「彼女たちは、学校の先輩の姿から地元で働き、生活していくイメージを具体的に得ています。また、歯科医師の先生たちや住民の方からの期待を直接的に受けることも、大きく影響しています」（宮崎学科長）

学生たちに対して、職業社会と地域社会の双方から、その成員（メンバー）になることが期待される。その役割期待と対峙しながら、学生たちは職業－地域社会への接近を行っていくのである。

そして、その結果として、卒業後は多くの学生が東信地区を中心とした長野県内に歯科衛生士として就職していく。すなわち、職業－地域社会に参入していくのである。

（４）小括

長野医療衛生専門学校の教育を通して、地域社会の歯科医療が成り立っていく。そして、地域社会で活躍する職業人たちが、長野医療衛生専門学校において後輩たちを育てていく。そうした循環によって、長野医療衛生専門学校と職業－地域社会がともに発展し、継続してきたのだと考えられる。

長野医療衛生専門学校の教育は、専門学校と職業－地域社会が連携して、地域の若者たちを、職業－地域社会が求める地域職業人材として社会化していく営みとしてとらえることができるだろう。

そして、上記で整理した長野医療衛生専門学校の特徴は、地方圏の専門学校において多数を占める医療分野や衛生分野、教育・社会福祉分野の他の専門学校にも一定程度、当てはまるものと思われる。それらの学校をとらえていく際の、１つのモデルとしても確認しておきたい。

４．長野美術専門学校（長野市）の検討

（１）学校概要と分野特性について

（a）学校概要

長野美術専門学校は、長野県唯一の美術専門学校である。学科構成は、ビジュアルデザイン科（３年制）、ビジュアルデザイン科（２年制）、ビジュアル

アート科（３年制）、ビジュアルアート科（２年制）、com. デザイン総合学科（４年制）の５つの学科。学修課程として、独自の「美専学修ライン」を設定し、専門性と履修性にもとづく主体的な学修を構想している。

インタビューは、理事長・校長である小林勝彦氏、副校長である松本直樹氏に対して、２回に分けて（対面・オンライン）、３時間程度実施した。

<表２ 長野美術専門学校の概要>

<p><歴史></p> <p>1946年 村田児童美術研究所開設</p> <p>1970年 村田美術学校認可</p> <p>1978年 長野美術専門学校に名称変更</p> <p>2005年 現在の小林勝彦校長体制へ</p> <p>2017年 新キャンパス完成</p> <p>※造形教育を基軸とする、長野県唯一の美術専門学校。</p>
<p><学科構成></p> <p>○ 7つのテクニカルライン</p> <p>デザイン、映像、イラストレーション、WEBメディア、ファインアート、アニメキャラクター、マンガ</p> <p>○ 5つの学科</p> <p>ビジュアルデザイン科（３年制）、ビジュアルデザイン科（２年制）、ビジュアルアート科（３年制）、ビジュアルアート科（２年制）、com. デザイン総合学科（４年制）</p>

（b）分野特性

長野美術専門学校は近代造形教育を源流に、美術・デザイン教育を行う。

長野美術専門学校がカテゴライズされる文化・教養分野は、大学など他の教育機関では実施されない多様な教育が展開されており、現在、専門学校の発展を牽引する分野である。専門学校ならではの文化・教養分野で学ぶことを求めて進学する学生も多く、学生数では医療分野に次ぐ割合を占めている。一方、扱う教育の特性上、文化・教養分野では都市圏の方が多様な学科を展開しやすく、学生も集まりやすい。そのため、地方圏における文化・教養分野の専門学校は、都市圏の専門学校との差別化も大きな課題となっている。

そうしたなか、長野美術専門学校は、長野県唯一の美術専門学校として、非常にユニークな教育を展開している。地方圏における文化・教養分野の専門学校の意義をとらえていくうえで、長野美術専門学

校の取り組みは1つのモデルとなると考えられる。

(2) 教育目的・教育対象・教育方法

(a) 教育目的

近代造形教育を源流として美術・芸術教育を展開する長野美術専門学校が、「美専哲学」として重視するのが「クリエイティブこそ社会形成の要」という点である。

「私が校長に就任し、理念に『クリエイティブこそ社会形成の要である』を据えました。現代社会は、経済的利益や効率性の価値観が優先的に膨れ上がり、『豊かさとは』という問いが生まれる余地が無くなっています。クリエイティブを重視する社会が、今の問題を解決する有効な手立てになるんじゃないかと、強く思っています」 (小林校長)

こうした問題意識から、長野美術専門学校は、地域社会をクリエイティブの観点から形成していくことを目指し、大きく2つの目的を設定している。第1が地域社会を形成していくクリエイティブ人材の育成であり、第2がクリエイティブ教育を通じた地域社会の形成である。

(b) 地域の若者を地域のクリエイティブ人材にしていく — 全人教育を通して

長野県で唯一の美術専門学校である長野美術専門学校には、長野県からの高卒者（さらには近隣県からも）が多く進学している。長野という地域で美術・デザイン教育を学び、長野を中心に働きたいという学生が多いという。

そうした学生たちに、長野美術専門学校が期待するのは、地域社会を支える主体的な市民になることであり、そして、地域の創造性を創り出すクリエイティブ人材になっていくことであるという。

「アートやデザイン教育は、全人的な基礎力を形成することにつながると考えています。それが、地域社会の市民の形成にもつながっていく。卒業生たちは、具体的には地域社会で市民として地域を形成していく主体になる。そこに、私たちは寄与していきたいのです」 (松本副校長)

「私たちの教育は、全人教育という考え方に近いと思います。専門性と基礎的な力というのは、そもそも分かれているものではない、市民性と創造性を同時に形成していく。それが、むしろリアルなんだと思います」 (小林校長)

(c) クリエイティブ教育を通して地域を変えていく — 社会学連携活動

地域社会と学校・学生が連携して、地域の自治体や企業が抱える課題をクリエイティブの力で改善・解決していく社会学連携活動は、長野美術専門学校が特に力を入れている教育活動である。

この活動で、特に注目したいのは、この活動が「地域社会のクリエイティブに対する認識を変える」ことに重点をおいている点だ。

「(社会学連携活動を本格的に開始する際) 社会とともにクリエイティブを学ぶというコンセプトにしました。(略) 学生がその連携によって実践的な学びを得るのは、もちろん主なんですけども、社会も一緒に学ばないとならないよねという意味です」 (小林校長)

「本校が輩出する人材っていうのはデザインの技術におけるクリエイティブ人材ということで、クリエイティビティというものが社会でどういうふうに生きていくのかということを(企業や社会の側に)実践的に体験してもらう。(略) それは翻って言えば、本校を出た学生たちが、活動できるフィールドが拡大することにつながるんです」 (松本副校長)

(3) 教育効果

これらの地域に根差したクリエイティブ教育を通して、学生達は、青年としての「全人的な基礎力の成長」(小林校長)をベースにしながら、地域のクリエイティブメンバーとして必要な知識・技能や価値観、そして、キャリアイメージを形成していく。

とくに、社会学連携活動のなかで、徹底的に求められるのが、「誰のための何のための仕事なのかという問い」と「与えられた条件のなかでの柔軟な対応と追及」(松本副校長)であり、それらを通して、職業実践的な能力が形成される。また、地域社会からのクリエイティブ人材としての期待を受け、役割を

自覚していくことも、彼らのアイデンティティ形成につながっている。

一方、長年にわたる社会学連携活動は、地域社会のクリエイティブへの認識を大きく変えてきている。現在、長野美術専門学校に寄せられる社会学連携活動への問い合わせは、毎年100件近くとなっており、社会学連携活動に対する地域社会の期待は大きい。地元の長野市とは2023年に連携協定も締結されている。

(4) 小括

(2) でとりあげた「専門性と基礎的な力というのは、そもそも分かれているものではない、市民性と創造性を同時に形成していく」という小林校長の言葉は、職業－地域的社会化の重層性を端的に表している。

クリエイティブ性は、地域社会から離れて発揮される抽象的なものではないし、クリエイティブ人材は地域社会からその必要性が認められない限り活躍することもできない。そうした鋭い洞察から展開される長野美術専門学校の取り組みは、長野という地域社会を「クリエイティブを重視する社会」へと変えていくことに寄与している。

3節でとりあげたエッセンシャルワーカーと比べると、地方圏におけるクリエイティブ人材は着目度が低くなってしまうが、「社会の空気をクリエイティブで埋めよう」(小林校長)という観点は、今後の地方圏の活性化等を考えていくうえで、欠かせないものである。長野美術専門学校の取り組みは、地方圏における文化・教養分野の専門学校の意義をとらえていくための、重要なモデルとなるはずだ。

5. 丸の内ビジネス専門学校(松本市)の検討

(1) 学校概要と分野特性について

(a) 学校概要

丸の内ビジネス専門学校は、1988年に長野県の専門学校で初めて外国人留学生を受け入れるなど、早い段階から、外国人留学生教育に積極的に取り組んできた専門学校である。現在(2024年)では、11か国から留学生を受け入れ、国際関係学科日本語コース(定員120名)を中心に、教育を展開している。

インタビューは、内川小百合理事長と莎仁副校長に対して、2時間半程度実施した。なお、丸の内ビジネス専門学校は、外国人留学生を対象とする教育

以外にも、様々な教育を展開している。本論では、外国人留学生教育に焦点をあてる。

<表3 丸の内ビジネス専門学校の概要>

<p><歴史></p> <p>1948年 丸の内タイピスト学校設立</p> <p>1976年 丸の内ビジネス専門学校に改称</p> <p>※長年にわたり地域の女性達を地域社会に送り出す役割を果たす。</p> <p>1988年 長野県の専門学校初の外国人留学生受け入れ</p> <p>2003年 日本語科新設</p> <p>※現在まで32か国の留学生を受け入れ。</p>
<p><学科構成></p> <p>○学科構成</p> <p>ビジネス科、グローバル・ビジネス科、国際関係学科(日本語コース)</p> <p>○その他</p> <p>日本語教師養成講座、KG 高等学院(松本キャンパス)、スーパーキッズ・マルノウチ、女性リーダー育成プログラムなど。</p>

(b) 分野特性

丸の内ビジネス専門学校がカテゴライズされる商業実務分野は、時代の変化に柔軟に対応してきた分野である。近年、若年人口の減少や労働力人口の減少が進むなか、専門学校における外国人留学生は増加傾向にあるが、商業実務分野の学校もそうした流れに対応し、外国人留学生向けの教育を展開している。

今後、地方圏における若年人口や労働力人口の減少への対応として、商業実務分野を中心に、外国人留学生教育が展開されていくことが予想されている。地方圏における商業実務分野の専門学校の意義をとらえていくうえで、丸の内ビジネス専門学校の取り組みは1つのモデルとなると考えられる。

(2) 教育目的・教育対象・教育方法

(a) 留学生を地域社会のメンバーに

外国人留学生を教育対象とする丸の内ビジネス専門学校が、第1に重視するのが、留学生を地域社会のメンバーへと成長させ、地域社会に送り出すことである。

「私たちの学校のルーツは女性の社会進出です。時代とともに、対象は留学生にかわってきましたが、地域社会で活躍したい人を受け入れ、きっちり送り

出すということは変化していません。いろんな国から来てくれた学生を、地域の一員として送り出すというのが、私たちの使命です」(内川理事長)

外国人留学生たちが、日本、そして松本という異文化社会で、働き生きていく。そのためには、日本語能力はもちろんのこと、職業社会で求められる専門的なビジネススキル、非認知能力なども養成しなければならない。また、地域社会の慣習などにも慣れる必要もある。だからこそ、日本語教育や職業教育、生活指導・支援を手厚く行う、という。

「たとえば、日本のゴミ出しのルールって、留学生からすると厳しすぎるんです。だから、言ってもわからないんですね。だから、生活したての頃は、私たちが朝一で、留学生が住んでいるアパートに行って、ゴミ出しのチェックとかもする。(略)それをみて、留学生は『ごめんなさい』ってなります」(莎仁副校長)

上述のような生活指導・支援を、生活全面にわたって行うことで、留学生たちを地域社会に馴染ませていく。地域社会のメンバーとして必要な行動様式を丁寧に身に付けていくことが何より重要だと、丸の内ビジネス専門学校はとらえている。

(b) 地域社会の認識を変えていく

丸の内ビジネス専門学校が第2に重視するのが、外国人留学生に対する地域社会の認識を変えていくことである。その背景には、長野県で最初に外国人留学生を受け入れた学校ならではの苦労と努力がある。

「(以前は)松本市の一般の人は、『留学生とか外国人はちょっと…。しかも、白人以外は嫌』っていう感じでした。アジアの子に対してはすごく冷たかった。アフリカの子に対しては『本当にこんな人がうちのアパートに入ったら困る』みたいな感じで…(略)。そういう認識とずっと戦ってきました」

(内川理事長)

外国人留学生が地域社会の一員になっていくためには、地域社会の側の認識も変えなければならない。そのために、生活指導・支援の徹底、地域のイ

ベントへの積極的な参加、職場で活躍する留学生の輩出などを積み重ねていき、地域社会の「信頼感や安心感を得ていくこと」(内川理事長)を続けてきたという。

たとえば、松本市のイベント「松本ぼんぼん」には、毎年、丸の内ビジネス専門学校の留学生が参加しイベントを盛り上げ、これまで、多くの賞を受賞してきている。

(3) 教育効果

(2)で記した丸の内ビジネス専門学校の取り組みは、学生にも、職業－地域社会にも効果をあげている。

まず、留学生への教育効果は非常に高い。現在、卒業生の約8割が、長野県内に就職するという。

「日本の文化習慣が好きで日本で就職したいと思って来た子が、地域で勉強して地域のために頑張りたい、となっていく。だから、多くが松本市、長野県内で就職します」(莎仁副校長)

また、卒業生たちの多くは、母国の家族や知人にも、丸の内ビジネス専門学校や松本市・長野県のことを口コミで肯定的に宣伝することが多い。そのため、日本への留学希望者のなかで、丸の内ビジネス専門学校を経由した松本市・長野県就職というキャリアルートも、一定程度構築されており、「生徒募集に困ることは、あまりない」(内川理事長)という。

職業－地域社会の認識も大きく変化している。とくに観光業や飲食業では卒業生が「中核的な人材として活躍」(内川理事長)し、留学生に対する信頼感を獲得してきたし、留学生に対する地域の人々の安心感も増えていると実感しているという。

(4) 小括

専門学校教育を通して、外国人留学生たちが職業－地域社会のメンバーとなっていく。当然のことながら、それは、日本人学生が職業－地域社会のメンバーになっていくプロセスにはない障害・困難が多く存在する。そして、地方圏ではその障害・困難は大きくなりがちだ。なぜなら、外国人に馴染みが薄い地方圏では外国人留学生に対する認識が高まりに

くく、また、外国人留学生たちからしても、魅力的な留学先として映りにくいからだ。

長年にわたる丸の内ビジネス専門学校の取り組みは、職業－地域社会のメンバーとして活躍する外国人留学生たちを多く送り出し、職業－地域社会における外国人留学生に対する認識を変化させてきた。そうした蓄積のうえに、「長野県の外国人留学生のキャリアルートとして確立した」(内川理事長)という、現状と自負がある。

地方圏の外国人留学生教育は、今後、ますますその重要性を増していくと思われる。それらをとらえていく際、丸の内ビジネス専門学校の取り組みは、重要なモデルとなるだろう。

6. 豊野高等専修学校（長野市）の検討

(1) 学校概要

豊野高等専修学校は、長野県唯一の高等専修学校として、長年にわたり独自の役割を果たしてきた。中心は高等課程であるが、専門課程もあるため、合わせて「5年」というスパンで生徒・学生達に向き合うことができることも特徴である。

なお、制度的には、高等専修学校（専修学校高等課程）は、本論が対象とする専門学校（専修学校専門課程）とは異なる。ただし、豊野高等専修学校は専門課程も有していること、また、地方圏の専門学校（専修学校）の意義を検討していくうえで、高等専修学校の検討も必要であることなどもふまえ、豊野高等専修学校も検討対象としている。

インタビューは、山岸建文理事長、奥田校長、市川副校長、山岸慎一郎氏に対して2時間程度実施した。

<表4 豊野高等専修学校の概要>

<p><歴史></p> <p>1947年 「豊野いばら塾」創立</p> <p>1976年 「豊野女子高等専修学校」と改称</p> <p>2012年 「豊野高等専修学校」に改称、男女共学になる</p> <p>※地域の後期中等教育の一端を担う、長野県唯一の高等専修学校。</p>
<p><学科構成></p> <p>高等課程（3年）と専門課程（2年）</p> <p>高等課程：生活服飾コース、生活情報コース、生活美術コース、生活介護コース。定員50名。</p> <p>専門課程：情報デザインコース、服飾デザインコース。定員40名。</p>

(2) 教育目的・教育対象・教育方法

(a) 教育対象

豊野高等専修学校では、高等課程（3年）と専門課程（2年）が併設されている。

高等課程の生徒のほとんどは北信地区から通ってきている。小学校・中学校などでの学校生活に、不安や困難を抱えてきた子どもたちが、生徒の多数を占める。

「本校では、7割、8割の生徒さんが中学校時代不登校か、または教室で授業を受けられなかった生徒さんになります。(略)発達障がいの診断があるという生徒さんも40%を超えています」 (奥田校長)

また、専門課程の学生のほとんどは、高等課程からの進学者となっている。

(b) 教育目的と教育方法

これらの生徒・学生に対する教育を行っていくうえで、豊野高等専修学校が最も重視しているのが、「信頼と安心の提供」(山岸理事長)である。

学校や社会に対する生徒たちの不安や困難は根深い。また、生徒の保護者、中学校教員らが抱える不安も大きい。そうした関係者らの不安をやわらげていくこと、困難を少しずつ解決していくことを豊野高等専修学校は、目指しているという。

こうした目的を達成するために、豊野高等専修学校がとくに重視しているのが、5年間という時間をかけた丁寧な支援と、地域と連携した職業教育である。

「『5年間で自分に合った職業、自分がやりたい職業を見つけませんか』それを合言葉にしています。(略)本校は、高等課程3年間、専門課程2年間、合わせて5年間かけて、自分というものをゆっくり考えることができます。本校の高等課程と専門課程が併設されているそのよさを生かしていきたい」 (奥田校長)

「実習や演習では、生徒たちはともかく集中している。これはすごい強みですし、自信にもつながります」 (市川副校長)

「この学校の学生の特性として、まだ就労意欲等が

明確ではない、社会や職業に対して自信がもてないということは多くあります。(略)だから、(情報ビジネスでも)ソフトの使い方を学ぶのが重要なのではなく、それを使って何をするのか、何ができるのか、に興味を持たせていきたい。そしてそれらを使って、自己表現をしていく先に自己効力感、自己有用感を育みたいというのが、教員全員の共通意識です」(山岸慎一郎氏)

中学校までの学校教育では、学びや生活になじめなかったり、自信を持つことができなかったりした生徒たち。彼・彼女らに対して職業教育を通してアプローチして、学びへの肯定感、そして自分自身の肯定感を育んでいく。そこに、豊野高等専修学校の教育の重点が置かれている。

(3) 教育効果

こうした教育のなかで、生徒・学生たちはゆっくりと自己肯定感を育み、学校や社会に対する信頼感なども獲得していく。中学校まで、年平均で30~50日近くの欠席が、平均で1ケタ台の欠席にまで下がるのも、その成果の1つだ。

そして、そうした姿は、保護者や中学校教員等の不安をも解消させていく。

「生徒さんたちが本校へ入学して少しずつ自分の居場所を見つけて、少しずつ自分らしさを出しながら、そして学校へ来る楽しさ、喜びというものを味わいながら、徐々に不登校、または集団不適合だった生徒さんが徐々にそれを解消していくというようなところで、本当に一番驚くのは保護者の皆さんになります。あの子がこんなふうになったんだって、卒業式のとき、本当に涙流されて卒業式を迎えられる保護者の方が多いんですね」(奥田校長)

高等課程の後の進路は様々だ。他の大学・短大・専門学校に進学したり、就職したりする生徒もいるし、豊野高等専修学校の専門課程に進学に進学し、その後、多くは地元で就職(福祉就労も含む)をしていく。

学校や社会に対して不安を抱えていた生徒・学生達が、豊野高等専修学校の教育を経て、進学や就職

を果たしてるのである。

(4) 小括

若者にとって、学校は職業社会や地域社会への社会化に向けての重要な経路の1つである。それゆえに、学校という「社会」に対しての社会化がうまくいかない場合、その先にある職業社会や地域社会への社会化も、困難になってしまっていく。それによって、若者たちはもちろんのこと、保護者や地域社会の不安を高めることにもなる。

職業－地域的社会化の観点からみたと、豊野高等専修学校は、若者たちが職業－地域社会に接近するための前段階である、「学校への社会化」の役割を担っていると、とらえることができる。すなわち、間接的に職業－地域社会のメンバーをつくりだすという意義を有しているといえるだろう。

周知のように、不登校生徒は増加し続けるなど、学校や社会に対して不安や抱える若者は増え続けている。都市圏には、通信制高校をはじめ不登校生徒などに対する教育機関が増えるなど、社会不安を抱える若者が「学校への社会化」をするための選択肢は増えてきている。しかしながら、地方圏においては、それらの選択肢は質量ともに不足している。そうした課題を解決していくうえでも、豊野高等専修学校の取り組みは、1つのモデルになると思われる。

7. 本論の結論と意義

(1) 本論の結論

本論は、地方圏における専門学校教育の意義を職業－地域的社会化の観点からとらえていくことを目的に、長野県の4つの学校を対象において、それらの学校における教育目的・教育対象・教育方法・教育効果について検討してきた。

それらの検討から、地方圏における専門学校教育の特徴を、以下のようにまとめることができる。

- ・教育目的：職業－地域社会メンバーの育成。
- ・教育対象：当該の地域社会に在住している(移住してきた)若者たち。
- ・教育方法：職業－地域社会との連携を軸とする職業教育。

- ・教育効果①：学生が職業－地域社会に接近・参入する。
- ・教育効果②：職業－地域社会側の専門学校生に対する認識が変化する（自分たちの社会のメンバーとして認識する、メンバーとして重視する）。

これらをふまえるならば、地方圏における専門学校は、職業教育を通して、職業－地域社会のメンバーを育成し、また、それらのメンバーを職業－地域社会に受け入れさせる土壌を形成していると、とらえることができる。すなわち、地方圏における専門学校教育は、職業－地域社会の再生産の役割を果たしている、言うことができるのである。

（２）本論の意義と残された課題

これまで、その実態や意義がとらえられることがなかった地方圏における専門学校教育の意義を、職業－地域的社会化の観点から描き出したことに、本論の学術的な意義がある。

また、本論においては、専門学校教育を把握する際のとらえ方として、職業－地域社会という観点が有効であることを示すことができた。この職業

－地域社会という観点を提起したことも、本論の意義である。

一方、事例や調査データは限定されており、本論で、地方圏における専門学校の意義を描き切れたわけではない。あくまで、本論は、地方圏における専門学校の意義のとらえ方を示したにとどまる。また、職業－地域社会の概念についても研磨が必要であろう。

<謝辞>

本論の執筆にあたり、調査に協力していただいた、長野県の4校の関係者の方々に深くお礼申し上げます。

<参考文献>

- 植上一希『専門学校教育と専門学校生のキャリア形成 - 進学・学び・卒後 -』大月書店、2009年。
- 植上一希「『大学の専門学校化』批判の問題性 — 専門職業大学の創設に関連して」『現代思想』44巻21号、2016年。
- 植上一希「青年の職業的社会化」『社会教育新論』ミネルヴァ書房、2022年。
- 水田真理「専門学校の地域配置について」『職業教育学研究』52巻1号、2022年。

受付日：2025年11月10日